

知覚経験の選言説と概念説

小口峰樹 (東京大学総合文化研究科科学史科学哲学)

mineki0120@hotmail.com

1. はじめに

本発表の目的は、ジョン・マクダウエルが知覚経験に関してそれぞれ独立の文脈において提起している「選言説(disjunctivism)」と「概念説(conceptualism)」の主張内容を概観し、概念説を援用した選言説の解釈および擁護を試みることである。

マクダウエルはその主著である『心と世界(*Mind and World*)』において¹、経験が信念に対して理由関係に基づいた合理的制約を与えるという論点を確保するために、「知覚経験がもつ内容は概念能力によって構造化されている」と主張し、知覚内容に関する「概念説」を提示している。他方でマクダウエルは、『心と世界』以前のいくつかの論文において²、知覚に関する素朴実在論的(naïve realistic)見方を擁護するために、知覚的な現われを「事実へとアクセスしているか、そうしたアクセスを行っているようにみえるだけか、いずれかの状態である」と解する「選言説」を提示している³。

概念説と選言説はそれぞれ対立する立場との間に論争を巻き起こしつつ⁴、現代の知覚の哲学における中心的な関心領域の一部を形成している。マクダウエル自身はこれらふたつの説の結びつきについて明確な論述を施していないが、われわれはひとまず両者の関係を次のように整理することができる。一方の「概念説」が確保しようとするのは、「知覚経験においてわれわれの信念は合理的な制約を獲得する」という論点であり、他方の「選言説」が確保しようとするのは、「知覚経験においてわれわれの心に提示されるのは実在の在り方そのものである」という論点である。したがって、これら二つの見方は、相伴うことで「経験は信念に対して実在からの外的な合理的制約を与える」という論点を構成すると考えることができる。換言すれば、選言説と概念説の両者はそれぞれ、「実在から経験へ」および「経験から信念へ」という二つの道筋を整備し、それらを正当化の序列のなかに正しく位置づけるために相補的に機能すると捉えられる。

本発表では、両者の関係性に対するこうした穏当な整理を越えてさらに踏み込んだ検討を行い、選言説に対して概念説を援用した解釈を施すことで、「概念説は選言説に対してその選言肢の内実を与え、選言説に対する積極的な論拠を提供する」という見方を提示し、概念説を介した選言説の擁護を試みる⁵。まずはこうした

¹ McDowell(1996)

² McDowell(1998b)および McDowell(1998c)

³ これらの名称はマクダウエル自身によるものではない。マクダウエルは後期ウィトゲンシュタインと同様に「構成的哲学(constructive philosophy)」を忌避し、自身の哲学を何らかの「説」や「主義」に属するものとして規定するのを慎重に避けている。本論でマクダウエルを「概念説論者」、「選言説論者」と呼ぶのは議論構成上の便宜のためにすぎない。

⁴ 概念説と対立する「非概念説(nonconceptualism)」は、知覚内容を非概念的なものであると主張する。代表的な概念説論者としては、マクダウエルの他に Brewer(1999)、Noë(2004)および門脇(2005)が挙げられる。他方、代表的な非概念説論者としては Evans(1982)、Peacocke(1992)および信原(2003)が挙げられる。当該論争に関しては Gunther(2003)を参照。一方で、選言説論者はしばしば自らを「意向説(intentionalism)」に対立するものとして描き出している。代表的な選言説論者としては Hinton(1973)、Snowdon(1990)および Martin(2002)が挙げられる。他方、代表的な意向説論者としては Harman(1990)、Tye(1995)が挙げられる。当該論争に関しては Martin(1994)、Martin(2002)および Crane(2006)を参照。後の註で述べるように、マクダウエルの選言説は必ずしも意向説一般と対立するものではない。

⁵ 私がこうした議論を提示するのは、第一に、従来明らかにされていなかった概念説と選言説のより積極的な関係性を明らかにすることにより、知覚経験に関するマクダウエルの描像を理解する上でのひとつの視座を提供するためであり(代表的な概説書である Gaynesford(2004)も Thornton(2004)も選言説を扱ってはいるが、それを概念説との関連のもとに捉えようとする分析は

作業に着手するに先立ち、概念説および選言説の主張内容をごく簡単に確認しておきたい。

2. 概念説

概念説に対しては様々な反論が提起されているが、ここでは概念説を擁護するための論証は割愛して他論に譲り⁶、以降の議論に資するような形で概念説の基本的な主張内容のみを摘出したい。

マクダウエルによれば、われわれの信念体系は、経験との間に正当化や根拠づけといった理由付与関係(reason-giving relation)を結ぶことにより、外的な合理的制約(external rational constraint)を獲得しなければならない⁷。しかし、仮に経験が信念とは異なり概念的に構造化されていないとすれば、それはいかにして信念に対する単なる「因果的」制約を越えた「合理的」制約を課することができるのだろうか⁸。この問題に対し、マクダウエルは経験概念を次のように捉え返すことで信念に対する合理的制約の可能性を保証しようとする。すなわち、知覚経験がもつ内容は、単に受容性(receptivity)の働きであるところの感性的直観によって獲得されるだけではなく、同時に自発性(spontaneity)の働きであるところの概念能力によって構造化されている⁹。つまり、知覚経験のもつ内容は「概念的」なのである。

思考における概念能力は自由で能動的な(active)自発性の働きとして特徴づけられる。他方、受容性の働きによって生じる知覚経験は受動的(passive)である。「経験において人は自身が内容を課されていることに気づく」¹⁰のであり、その内容の最終的な決定権はわれわれの側ではなく世界の側へと委ねられている。こうした意味において、知覚はミニマルな受動性を絶えずもち続けている¹¹。マクダウエルによれば、思考における概念の働きと経験における概念の働きとは、それが能動的な「行使(exercise)」であるか受動的な「現実化(actualization)」であるかという違いはあれ、基本的には同種のものである¹²。

知覚の享受において、われわれは当該の内容に対して何らかの態度をとるための「権利」を付与される¹³。

いずれにおいても認められない)、第二に、概念説の主張に基づくという制約がついた形においては、選言説の内実を明らかにすることによってそれを支持する新たな論証を提示するためである(選言説を支持する既出の論証としてはMartin(2002)が挙げられる。マーティンは、「知覚の透明性」を説明する際には志向説と選言説の間で違いは生じないが、「想像の透明性」を説明する際に選言説の側に優位性が認められると論じている。本発表が提示する論証はこうした迂遠な経路を辿ることなく知覚経験そのものの内で構成される)。

⁶ 私は小口(2007)にて概念説を擁護するための論証を展開しているのでそちらを参照されたい。

⁷ McDowell(1996),pp.8-9

⁸ マクダウエルをこうした疑問へと駆り立てているのは、彼がセラーズやデイヴィッドソンから受け継いだ「ある二つの項が理由付与関係に立つためには、両者はともに概念的に構造化されていなければならない」という洞察である(Sellars(1997)およびDavidson(1986))。マクダウエルはデイヴィッドソンの「ある信念を抱くことの理由とみなしうるものは他の信念以外にはない」という言葉を修正し、「ある信念を抱くことの理由とみなしうるものは、同様に概念の空間のなかに存在している他のもの以外にはない」と述べている(McDowell(1996),p143)。この「概念の空間のなかに存在している他のもの」としてマクダウエルの念頭にあるものが概念的内容をもったものとしての「経験」である。

⁹ McDowell(1996),p.9

¹⁰ Ibid.

¹¹ ティム・クレインなど非概念説論者の一部は、知覚の受動性を知覚内容が非概念的であることの証拠と見なし、マクダウエルの概念説はこうした特徴を捉え損ねていると批判を加えている(Crane(1992)および信原(2003))。これに対しては、本文における概念能力の「行使」と「現実化」の区別によって応えることができる。

¹² McDowell(2000),pp.11-12 (邦訳 p.187)

¹³ バリー・ストラウドはマクダウエルへの批判論文のなかで、知覚が思考と理由付与関係を結びうるのは知覚が一種の命題的態度であるからだとして述べている(Stroud(2002),pp.84-90)。マクダウエルはストラウドに対する応答のなかでこの主張に異を唱え、知覚経験はそれ自体としては命題的態度を含まないが、なお関連する信念との間に理由付与関係を構成しようと論ずる

(McDowell(2002),p.277-279)。知覚が態度を含まずに受容されうるとする根拠は、「われわれは知覚内容に対していかなる判断も差し控えながら、なお実際に真である知覚内容をもちうる」というものである。この場合、態度自体は差し控えられることでキャンセルされ、いかなる態度も伴わない内容が享受されている。だが、こうした場合でも、後に何らかの理由が与えられることで、われわれは差し控えを解除し、改めて享受した内容に対して受け入れの態度をとることができる。つまり、知覚経験はそれ自体命題的態度を欠きながら、なお命題的態度との間に理由付与関係を築きうるのである。

知覚経験が思考に対して課すこの「合理的な権利付与 (rational entitlement)」¹⁴によって、われわれの信念体系は世界からのしかるべき制約を手にする。マクダウエルは概念説を唱えることにより、われわれの思考が経験において合理的に制約されるその仕方に関するひとつの有力な描像を提出しているのである。

3. 選言説

上記のように、マクダウエルが概念説において確保したのは、信念に対して「経験から」与えられる合理的制約の可能性である。だが、われわれが真に欲するのは（単に「経験から」ではなく）「実在から」与えられる外的な制約である。それゆえ、マクダウエルは「経験においてわれわれは実在する世界そのものへと開かれている」ということをもまた示さなければならない。そこでマクダウエルが訴えるのが、以下に説明する「選言説」である。選言説には各論者の観点に応じて相異なる様々な変種が存在するが¹⁵、ここではマクダウエルのそれに焦点を絞る形で解説を行う。

3-1. 最大公約数論法

まずは選言説へ至る議論の背景を押さえておこう。選言説は錯覚論法(the argument from illusion)あるいは幻覚論法(the argument from hallucination)へのひとつの対処法として捉えることができる。私が縁側の上でうたた寝をする一匹の猫を見ているとしよう。私には、その猫は外界に存在している実在の猫そのものであるように見える。つまり、私の知覚経験に現われているのは実在の対象そのもの、実際に生じている事実そのものであるように思われる。だが、私が現在置かれているのとまったく同じ心的状態にありながら、実際には私が幻覚に陥っており、それゆえそこに存在しているように見える猫は実際には存在していないということは可能であるように思われる。われわれはいかなる知覚経験を有しているときにも、こうした誤った経験に陥っている可能性を免れてはいない。だが、われわれは正しい経験と誤った経験とを主観的な観点から識別することはできない。なぜなら、誤った経験とは「経験が生じた時点においては正しい経験であるかのようにみえた経験」であり、それゆえ、経験の誤りが判明するとしてもそれは常に事後的にでしかないからである¹⁶。だとすれば、ここから以下のような帰結が生じてくるのは避けがたいだろう。

定義上、誤った経験においてわれわれが捉えているのは、実在や事実に達していない何ものかである。しかし、誤った経験と正しい経験が主観的に識別不可能であり、かつ、両者が同じ心的状態にあるのだとすれば、正しい経験においてわれわれが捉えているのも、実在や事実に達していない何ものかであると考えざるをえなくなるだろう。すなわち、われわれが知覚経験において捉えているのは正しい経験と誤った経験とに共有されている何らかの内在的な「共通要素」であり、それを真にする実在そのものは経験にとって外在的なものにす

¹⁴ McDowell(2005),p.6

¹⁵ 選言説の提唱者であるヒントンは知覚的な現われに関する言明を選言的な言明に還元するという文脈でその発想を用いている (Hinton(1973))。また、スノウドンは「知覚の因果説」を批判する文脈において (Snowdon(1990))、マーティンは「知覚の志向説」を批判する文脈において (Martin(2002))、それぞれ選言説的な発想を活用している。マーティン (Martin(2002)) やクレイン (Crane(2006)) は志向説と選言説を対立するものと捉えているが、マクダウエルの選言説は知覚経験の志向的性格を否定するものではなく、それゆえ志向説の一種として捉えることも可能である。こうした観点からすれば、本発表は選言説の洗練化を行うものであると同時に、志向説の洗練化を行うものでもあると言えよう。

¹⁶ 本発表では「誤った経験」をこのように「経験が生じた時点においては正しい経験であるかのようにみえた経験」として捉える。それゆえ、すでに通曉している錯視図形を見ることは「誤った経験」ではない。われわれはリユラー・リヤーの錯視における二本の線分の長さが実際には等しいことをすでに知っており、このような事例においては「正しい経験との主観的な不可識別性」が成立していないからである。同様に、それが幻覚であると意識されているような経験は、本発表においては「誤った経験」ではない (オースティンが指摘するように、正しい経験と幻覚経験とは実際のところ決して「主観的に識別不可能」ではないかもしれない (Austin(1962),p.49 (邦訳 p.79))。こうした指摘はわれわれにとって歓迎すべきことであるが、本発表では「完璧な幻覚」が成立するという幻覚論法の仮定を受け入れた上で議論を進める。

ぎないのである¹⁷。

歴史上多くの哲学者たちがこうした「最大公約数論法(highest common factor argument)」¹⁸を受け入れ、主観的な観点から把握可能な共通要素として、例えば、「感覚与件」や「内的表象」などを導入してきた。それに対し、マクダウエルはこうした最大公約数論法を掘り崩すために知覚的な現われを選言的に捉えようとする。

3-2. 知覚的現われの選言的理解

知覚経験が「実在への開かれ」であることを保証しようとするマクダウエルにとって、外界から切断された主観的領域を想定し、知覚的な現われとしての経験をその内部へと囲い込んでしまう最大公約数論法は甚だ受け入れがたいものである¹⁹。これに対してマクダウエルは、正しい知覚と誤った知覚の主観的な不可識別性という現象学的事実を認めつつも、知覚的な現われを「事実へとアクセスしているか、そうしたアクセスを行っているようにみえるだけか、いずれかの状態である」と選言的に理解し、両者を異なった種類の心的状態として扱うことで、最大公約数論法への動機づけが強制的なものではないということを示そうとする²⁰。

選言説によれば、誤った事例において経験が捉えているのは「事実そのもの」ではなく「事実の単なる見かけ(mere appearance)」である。しかし、われわれは正しい事例において経験が捉えているのも「単なる見かけ」であると、すなわち事実未満の何ものかであると認めるべきではない。反対に、こうした事例における知覚的現われには「事実それ自体」が開示されているのである。

だが、以上のように理解されるマクダウエルの選言説が真に最大公約数論法への誘因を静めえているかは明らかではない。それを明らかにするためには、「正しい知覚と誤った知覚はそれぞれ異なる心的状態である」という選言説の主張の内実をさらに分析する必要がある。なぜなら、主観的な知覚的現われが経験内容の特定に関する重要な証拠とみなされる限り、主観的に識別不可能な二つの経験は同じ経験内容を持ち、それゆえ同じ心的状態によって実現されているとみなすのが妥当であると思われるからである。

4. 選言説と概念説の接合

4-1. 知覚内容の豊かさと対象依存性

私はこの問題に対し、概念説を媒介としながら選言説を再解釈することで応じたい。そのために、「知覚内容の豊かさ(richness)」と「単称的内容の対象依存性(object-dependency)」という二つの論点をあらかじめ簡潔に説明しておこう²¹。

まずは「知覚内容の豊かさ」である。知覚経験はその内容に対して何らかの態度をとる(=判断する)ための権利を思考者へと与える。だが、知覚経験がもつ内容は実際に判断へともたらされるものに尽きると考える必要はない。マクダウエルは、知覚経験が備えている概念的内容は実際に知覚的判断によって利用される以上

¹⁷ McDowell(1998b),p.241

¹⁸ McDowell(1998c),p.386

¹⁹ 最大公約数論法から導かれるこうした「内的領域としての心」という見方はマクダウエルによって「デカルト的描像」と呼ばれ、繰り返し批判的とされている(McDowell(1998b),p.236)。デカルト的描像は経験を内的領域へと囲い込み、それを内観にとって「透明なもの」として扱うことで、主観的現われを経験的知識の基礎へと祀り上げようとする。マクダウエルが選言説を唱える動機の一つは、こうしたデカルト的描像からの脱却を図ることである。

²⁰ McDowell(1998c),pp.386-387

²¹ 以下の分析は村井(2004)の論考から大きな示唆を得ている。私の分析は村井(2004)で用いられた基本的な道具立てを引き継ぎつつ、それが示した論点をさらに展開するものであるが、概念説との結びつきのもとに選言説の解釈として議論を組み立てた点において村井のものとは異なる。また、後に示す「懐疑のグローバル化」という論点は私独自のものである。

に豊かなものであると考える。われわれの知覚は「開かれた多様な(open-ended manifold)」²²内容をもっており、知覚的判断は当該の知覚が備える豊かな内容のうちから「取捨選択」を行うことでその特定の内容を獲得する²³。ある猫を知覚しているというような何気ない状況においても、そこには実際われわれが利用し尽くせないほどの豊かな知覚内容が控えているのである²⁴。

次に、「単称的内容の対象依存性」である。マクダウエルは真理値ギャップ(truth-value gaps)を認め、単称的判断が真理条件をもつか否かはそれが指示する個別的な対象が存在するか否かに依存すると考える²⁵。つまり、単称的判断はその内容の存立に関して「対象依存性」を示すのである。例えば、「あの猫は茶色い」という直示的な判断は、それが指示している猫が実際に存在する場合に限り真偽が定まる。もし指示対象が存在していないならば、当該の判断は「無意義(nonsense)」であり、そもそも内容を備えた真正な判断とは認められない。このことは、われわれが単称的な判断を下していると思っていながら、実際にはそうした判断を下していると思いをしているにすぎないような状況が成立しうるということを意味する。

概念説によれば、思考と経験は能動と受動の違いこそあれ、ともに概念的に構造化された内容をもつ。それゆえ、知覚経験のもつ内容に対しても、単称的思考と同様に真理値ギャップを認めることができる。すなわち、概念説を媒介することで、われわれは知覚内容がまさに思考と同じ意味において対象依存的であるという論点を手にすることができるのである²⁶。だとすれば、単称的思考と同様、対象が不在の場合には、その対象に関する知覚内容がそもそも存在しておらず、それゆえ当該の知覚経験がもつ合理的な権利付与も成立していないということになる²⁷。それが思考であろうと知覚であろうと、ある心的状態が内容を備えているか否かは、主体の「内部」を探查するだけでは決定することができない。この点で、マクダウエルは心的内容に関する「外在主義」を採用している²⁸。

²² McDowell(1998d),p.413

²³ 無論、こうした「取捨選択」は常に意識的になされる必要はない。われわれは通常の知覚的判断においては非推論的かつ自動的に信念を形成する。だが例えば、すでに通曉している錯覚図形を見る場合、われわれはその見え姿を信念として受け入れるのを熟慮的な取捨選択に基づいて拒否することができる。知覚的判断における「取捨選択」はこうした意味で権利上可能であればよい。

²⁴ この点と関連して、ノエは「変化盲(change blindness)」の実験などを論拠として、われわれは豊かな内容をもった内的表象など有してはいないと論ずる(Noë(2004),chap.2)。さらに彼は、「経験内容の豊かさは、われわれが写真のように豊かな内的表象を有していることに由来するのではなく、われわれが世界へのアクセス可能性を有していることに由来する」と主張し、経験がもつとされる豊かさの担い手を表象から世界そのものへと移行させる。こうしたノエの指摘は妥当なものと思われる。それゆえ、われわれはマクダウエルの言う「世界へと開かれた経験の豊かさ」を、知覚者が「所有している」豊かさではなく、知覚者が「アクセス可能な」豊かさとして規定すべきであろう。だがこれは、経験内容に相即的に対応するものとして「現象的な心的状態」を語ることの妥当性そのものを疑わせしめる。なぜなら、豊かな潜在的内容が知覚者のアクセスを待つものとして世界の側にあるとすれば、そうした内容が知覚者の心的状態の構成に現勢的に関わると考えるべき理由は失われるからである。もちろん、アクセス可能性にも単なる注意転換によるものから身体運動によるものまで様々な段階があり、そのうちの一部は心的状態の構成に現勢的に関わっていると考えられるため、そうした懐疑はここでのマクダウエルの議論に大きく影響はしない。ノエが示しているこうした方向へのさらなる議論展開は今後の課題としたい。

²⁵ McDowell(1998a)および McDowell(1998b)

²⁶ もし経験内容が「非概念的」であるとするならば、思考において成立する対象依存性という論点を平行的に経験へと適用することは正当化されない。なぜなら、非概念的な経験内容に対しては思考内容のように真理条件を定めることができず、それゆえ真理値ギャップが成立する余地もないからである。

²⁷ むしろ、直示的指示が知覚を介した活動であることを鑑みれば、直示的な単称的思考の内容が成立しているか否かは、関連する知覚経験のそれが成立しているか否かに依存していると言えよう。

²⁸ 志向説論者であるバージは、知覚経験の内容に記述的要素には還元できない単称的要素を認めつつも、それが対象依存的であることを否定している(Burge(1991),pp.208-209)。その根拠は「われわれの信念はそれが指示に成功している場合も失敗している場合も同じ志向的内容をもち続けるだろう」という趣旨のものであり、まさに最大公約数論法と同様のものである。バージが知覚内容の対象依存性を認めなかったのは、以下で私が論ずるような「誤った経験」における錯覚と幻覚の区別を考慮せず、それを一元的に捉えてしまったからではないかと推察される。バージは志向説論者であるが、マクダウエルが選言説において反対するのは志向説一般ではなく、知覚内容に対象依存性を認めない立場であり、経験が志向的であることそのものは否定していない。むしろ、本発表において示されるマクダウエルの選言説はバージにみられるような志向説の不備を改正するものとして捉えられる。

4-2. 錯覚と幻覚の分析

以上の二点を踏まえた上で、次に選言説の具体的な分析へと移行する。

まず、「経験の誤り」に関して可能な二通りの解釈を区別したい。それは「錯覚」と「幻覚」の区別である。一般に、錯覚とは、実際に存在する知覚対象に関してそれがもつ諸特性を誤って認識してしまう現象を指す。他方、幻覚とは、実際には存在しない対象についてそれがあたかも存在するかのように知覚してしまう現象を指す。具体的に言えば、知覚者が「あの猫は茶色い」という知覚内容をもった場合、その猫が本当は白かったならば錯覚としての誤りを犯したことになる、そもそもその猫が存在さえしていなかったならば幻覚としての誤りを犯したことになる²⁹。では、この区別を先の二つの論点と突き合わせるとどのような帰結が導かれるだろうか。

①錯覚経験の事例

錯覚の場合、知覚者は当該の経験がもつ豊かな内容のうちの一部に関して誤りを犯しているにすぎない。例えば、「あの猫は茶色い」という判断内容に関しては誤っているととしても、「あの猫はうたた寝をしている」や「縁側に一匹の猫がいる」といった判断可能な内容に関しては正しいと言える余地がわれわれには残されている。それゆえ、錯覚の場合には、知覚者は経験が与える判断可能な内容の多くに関して誤っていないと考えられる。だとすれば、たとえ知覚内容に部分的な誤りが含まれているにせよ、他の真なる内容に関してわれわれは実在に開かれていると言えよう。このように錯覚経験が「事実に達していない何ものか」ではないとすれば、そこからは最大公約数論法へと向かう誘因も生じることはないだろう。なぜなら、最大公約数論法は誤った経験が事実未満のものであるということを経験に展開されるものだからである。

②幻覚経験の事例

例えば、目の前に一匹の猫の幻覚が生じているとする。ここで、当該の経験に一人称的な観点から帰属される内容のうち、その対象に関する単称的に思考可能な内容に着目しよう。「あの猫は茶色い」や「あの猫は寝ている」といった形において表現可能な内容がこうしたものに当たる。一人称的観点からすれば、幻覚経験は真偽を帰属できるようなある一連の単称的内容をまさにその経験のレベルにおいて有しているようにみえる。しかしこの場合、そもそも「あの猫」で指示される対象が実際には存在していないのであるから、先に述べた単称的内容の対象依存性という論点を思い起こすならば、当該の幻覚経験には実際のところそうした内容が備わっていないということが帰結する³⁰。

私は、ここで述べたような幻覚経験こそが、選言説における選言肢のひとつである「事実の単なる見かけ」に内実を与えるものであると解する。この事例においてそれが「単なる見かけ」であるのは、当該の経験がある対象に関する内容を備えているという見かけを呈しながら、実際にはそうした内容をまったく備えていないからである³¹。「正しい経験」と（この意味における）「誤った経験」との相違は、それらが一人称的観点から

²⁹ 錯覚と幻覚の区別に関しては他にも様々な基準が考えられるが（例えば、誤りが判断のレベルに帰属されるか経験のレベルに帰属されるか、誤りの原因が主体の側にあるか世界の側にあるか、等々）、ここでは個体と属性との間の常識的な存在論的区別を認め、錯覚と幻覚の相違を本文のように定めておく。しかし、錯覚と幻覚には様々な境界事例もあり、実際には本文のような基準で両者を截然と区別することは困難である。本文で論じられる内容を受けて言えば、ここでの区別のポイントはむしろ「その経験がどのような判断可能な内容をもっているものとして一人称的観点から捉えられるか」という点に存する。

³⁰ 後にそれが幻覚経験であることが判明したならば、その時点において主体が行っていた「この猫は茶色い」という知覚的判断は棄却され、「その時、私には茶色い猫が見えているかのように思われた」というような正しい判断へと修正されるだろう。つまり、当該の幻覚に関する判断は実在へのコミットメントのない「安全な」判断へと切り替えられるのである。それはまさに、当該の幻覚経験が実際に備えていたのが（見かけとは異なり）実在関与的な内容ではなかったという事実を反映している。

³¹ もちろん、この場合においても当該の幻覚を当該の幻覚たらしめている何らかの原因（例えば、幻覚を引き起こすような脳状態）は成立しているはずであるが、そうした原因は主観的な観点からの経験内容の特定には現われてこないため、「現象学的」

帰属される内容を実際に備えているか否かという点に存する。両者がこのように内容を備えているか否かという点において異なるのであれば、両者と関連する心的状態も互いに異なると言える。そして、両者が互いに異なる心的状態であるとすれば、そもそも最大公約数論法はその出発点に立つことさえできない。なぜなら、最大公約数論法は「正しい経験と誤った経験が主観的な観点から互いに識別不可能であれば、両者は同じ心的状態である」という前提から出発するものだからである。

4-3. 懐疑のグローバル化

だが、錯覚経験の事例に関しては次のような反論が提起されるかもしれない。先に、錯覚経験は、たとえ誤った部分を含むにせよ、その豊かな内容に含まれる他の真なる部分を介して実在へと開かれていると解釈できると論じた。しかし、経験のどの任意の部分に対してもその真偽に関する主観的な不可識別性が成り立つとすれば、それらの真であると思われる内容が実際に真であるか否かに関してわれわれは懐疑論的な問いを立てることができる。だとすれば、こうした懐疑論的な問いを経験の豊かな内容の全体へとグローバル化することで、われわれは再度最大公約数論法の罠に陥ってしまうのではないか³²。

だが、こうした反論は自らの足場を掘り崩すものでしかない。なぜなら、懐疑のグローバル化が含意するのは、経験内容が全体として実在と調和していないかもしれないという可能性を積極的に承認することだからである。もしこうした可能性を承認するとすれば、知覚対象に関する様々な存在判断（例えば、「その縁側の上に一匹の猫が存在している」といった）までもが全面的に誤りであることになり、その結果、知覚内容の全体は幻覚経験の場合と同様に内容を失うことになる。だとすれば、われわれはこうした事例を「事実の単なる見かけ」として選言説の枠内において問題なく処理することができる。懐疑のグローバル化は、経験内容が全体として誤っているという可能性ではなく、経験がそもそも全体として内容をもっていないという可能性を導くにすぎないのである。

5. 結論

繰り返し述べれば、選言説は、正しい経験と誤った経験における主観的に識別不可能な現われを、「事実へとアクセスしているか、そうしたアクセスを行っているようにみえるだけか、いずれかの状態である」と選言的に捉える説である。われわれは「経験の誤り」を錯覚と幻覚の二種類に大別し、それらに分析を施すことで、両者をそれぞれ「その内容の一部が誤りである経験」（錯覚）、「それが内容をもっているという見かけが誤りである経験」（幻覚）として捉え返した。本発表の論述より、選言説の言う意味での「誤った経験」とは「錯覚経験」ではなく「幻覚経験」のことであると結論できる。錯覚経験はその豊かな経験に含まれる真なる内容を介して実在へと開かれていると考えられるため、最大公約数論法を生じさせるような「事実未満の経験」ではなく、それゆえ「事実の単なる見かけ」ではない。他方、幻覚経験は主観的には事実に関する内容をもっているかのようにみえるが、実際のところそれは「事実の単なる見かけ」にすぎない。この点で幻覚経験は内容を有する正しい経験とはまったく異なる心的状態を構成すると考えられるのであり、それゆえ両者の経験の間には最大公約数論法が有する「共通の心的状態」という前提がそもそも成立しない。このことは、概念説を介

には無関係なものとして扱うことができる。たとえ幻覚の場合であろうと、われわれは自らの脳を「見透かし」ながら知覚を行っているのであり、まさにそこに存在するかのように見える対象のみが見えているのである。そして、真正な経験とは異なり、幻覚の場合、「そこに存在するかのように見える対象」は経験を生起させている原因ではない。

³² 幻覚経験の事例に対してこうした懐疑のグローバル化による反論は成立しうるだろうか。答えは否である。なぜなら、すでに内容をもたない部分が含まれている以上、幻覚の外部の内容（例えば縁側や庭に関する内容）が真であれ偽であれ、それと関連する心的状態は真正な経験と幻覚経験との間で必ず異なってくるからである。

して導かれる「経験内容の対象依存性」という論点を適用することで明らかにされる。幻覚経験において一人称的観点から帰属される単称的内容は、そうした内容が保有されているという見かけを呈しながらも、実際には指示対象を欠いた「空虚な」ものにすぎない。経験内容の真偽に関してだけでなくその存否に関しても、主観的な現われは世界から独立な証拠を提供するものではないのである。また、誤りの可能性をグローバル化した場合も、局所的な錯覚を全域的な幻覚へと帰着させるのみであり、選言説の範囲内で適切に処理可能である。それゆえ、いずれの「誤り」においても、われわれは最大公約数論法を斥け、真なる内容をもった経験を「実在への開かれ」として認めることができるのである。

参考文献

- Austin, J. L., 1962, *Sense and Sensibilia*, Oxford, Oxford University Press. (『知覚の言語』、丹治信春・守屋唱進訳、勁草書房、1984)
- Burge, T., 1991, “Vision and Intentional Content”, in *John Searle and His Critics*, ed. LePore, E. and Van Gulick, R., Oxford, Blackwell.
- Brewer, B., 1999, *Perception and Reason*, Oxford, Oxford University Press.
- Crane, T., 1992, “The nonconceptual content of experience”, in *The Contents of Experience: Essays on Perception*, ed. Crane, T., Cambridge, Cambridge University Press, pp.136-157.
- , 2006, “Is There a Perceptual Relation?”, in *Perceptual Experience*, ed. Gendler, T. S. and Hawthorne, J., Oxford, Clarendon Press, pp.126-146.
- Gunther, Y.H. ed., 2003, *Essays on Nonconceptual Content*, Cambridge; Mass., The MIT Press.
- Davidson, D., 1986, “A Coherence Theory of Truth and Knowledge”, in *Truth and Interpretation: Perspective on the Philosophy of Donald Davidson*, ed. LePore, E., Oxford, Blackwell, pp.307-319.
(「真理と知識の斉合説」『主観的、間主観的、客観的』、丹治信春監修、春秋社、2007、所収、pp.218-251)
- Evans, G., 1982, *The Varieties of Reference*, Oxford, Oxford University Press.
- Gaynesford, M., 2004, *John McDowell*, Cambridge & Malden, Polity Press.
- Herman, G., “The Intrinsic Quality of Experience”, in *Philosophical Perspectives 4: Action Theory and Philosophy of Mind*, ed. Tomberlin, J., California, Ridgeview. (「経験の内在的質」『シリーズ心の哲学 III 翻訳篇』、鈴木貴之訳、信原幸弘編、勁草書房、2004、所収、pp.85-120)
- Hinton, J. M., 1973, *Experiences*, Oxford, Oxford University Press.
- 門脇俊介、2005、「知覚経験の規範性」『哲学雑誌』、120 巻、792 号、所収、pp.25-50
- Martin, M., 1994, “Perceptual Content”, in *A Companion to the Philosophy of Mind*, ed. Guttenplan, S., Oxford, Blackwell, pp.463-471.
- , 2002, “The transparency of Experience”, in *Mind & Language*, Vol.17, No.4, pp.376-425.
- McDowell, J., 1994 ; reissued with an Introduction, 1996, *Mind and World*, Cambridge; Mass., Harvard University Press.
- , 1998a, “Truth-Value Gaps”, in *Meaning, Knowledge, and Reality*, Cambridge; Mass., Harvard University Press, pp.199-213.
- , 1998b, “Singular Thought and the Extent of Inner Space”, in *Meaning, Knowledge, and Reality*, Cambridge; Mass., Harvard University Press, pp.228-259.
- , 1998c, “Criteria, Defeasibility, and Knowledge”, in *Meaning, Knowledge, and Reality*, Cambridge; Mass., Harvard University Press, pp.369-394.
- , 1998d, “Reply to Commentators”, in *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.58, No.2, pp.403-431.
- , 2000, “Experiencing the World”, in *John McDowell: Reason and Nature: Lecture and Colloquium in Münster*, ed. Willaschek, M., Hamburg, LIT, pp.3-18. (「世界を経験する」『現代思想 2004 年 7 月号』、荒畑靖宏訳、青土社、2004、所収)
- , 2002, “Responses”, in *Reading McDowell: On Mind and World*, ed. Smith, N.H., London and New York, Routledge, pp.269-305.

- , 2005, “Conceptual Capacities in Perception”, (来日時の京都講演における発表原稿)
- 村井忠康、2004、「認識的仲介者なき経験主義は可能か」『現代思想 2004年7月号』、青土社、所収、pp.196-205.
- 信原幸弘、2003、「捉えがたき明晰さ」『思想』No.943、所収、pp.142-160.
- Noë, A., 2004, *Action in Perception*, Cambridge; Mass., The MIT Press.
- 小口峰樹、2007、「知覚経験の概念性——ジョン・マクダウエルの『心と世界』を中心に——」、修士学位論文、東京大学
- Peacocke, C., 1992, “Scenarios, concepts and perception”, in *The Contents of Experience: Essays on Perception*, ed. Crane, T., Cambridge, Cambridge University Press, pp.105-135.
- Putnum, H., 1999, *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*, New York, Columbia University Press.
(『心・身体・世界 三つ撚りの綱／自然な実在論』、野本和幸監訳、法政大学出版会、2005)
- Sellars, W., 1997, *Empiricism and the Philosophy on Mind : With an Introduction by Richeard Rorty a Study Guide by Robert Brandom*, Cambridge; Mass., Harvard University Press, (『経験論と心の哲学』、浜野研三訳、岩波書店、2006)
- Snowdon, P., 1990, “The Object of Perceptual Experience”, in *Proceedings of Aristotelian Society*, supplementary vol.64, pp.121-150.
- Stroud, B., 2002, “Sense-experience and the grounding of thought”, in *Reading McDowell: On Mind and World*, ed. Smith, N.H., London and New York, Routledge, pp.79-91.
- Thornton, T., 2004, *John McDowell*, Montreal & Kinston, McGill-Queen’s University Press.
- Tye, M., 1995, *Ten Problems of Consciousness*, Cambridge; Mass, The MIT Press.